令和元年（2019）
阿づまの光
9月号・Septembro

【鶴山土・本宮山松釉】

教主さまお作　灰釉茶盌「夕さり」

題字出口直日

通巻第606号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

今（いま）といふいま善（よ）き心（こころ）よき言葉（ことば）
よき行（おこな）ひをはげむこそ善（よ）き

出口王仁三郎聖師

「耀盌顕現」から70年

総務管理課長　椎野恭三

上野・東京国立博物館の庭園に5棟のお茶室があります。その中の一つ、「応挙館」は18畳2間続きの広間がある平屋造り。名古屋市郊外にあった天台宗寺院・明眼院の書院が移築されたもので、円山応挙が眼病で逗留したおりに揮毫した墨画が床や襖に描かれています。

15年前、この場所で茶会と大本講座を組み合わせた大本紹介講座を開催しました。庭園の木々の緑が美しく、立派な建物、豪華な床の間など、楽しいひとときが思い出されます。

昭和24年2月6日、美術評論家の加藤義一郎氏が備前焼の名家・金重邸で聖師さまの手作り楽茶盌「天国廿八」「御遊」を初めて目にしました。わび、さびの世界から新しい世界を展望する明日に輝く茶盌との意味を込め「耀盌」と命名、『日本美術工芸』誌3月号に「耀盌顕現」のタイトルで世に紹介しました。その年、日本陶磁協会の主催で、「出口王仁三郎聖師楽焼鑑賞会」が、大阪（8月）、京都（9月）に続いて、東京では10月8日に開催。その東京での会場が、この「応挙館」だったのです。

それからちょうど70年を迎えた本年、東京本部開設50周年記念事業の一環として10月3日から6日まで、耀盌顕現70周年記念・東京大本芸術祭「出口王仁三郎耀盌展」を開催します。会場も70年前と同様に「応挙館」です。

かつて加藤義一郎氏は、耀盌について、「質はらくやきである。形は十全具備の茶盌である。作は本阿弥光悦や久田宗全に優るとも劣らない。絵は南欧の陽光の下に生まれた、後期印象派の点描を偲ばせ、ルリ・緑青・黄土・エンジ・ゴフンなど、みな日本離れした冴えにかがやく。ことに刷き上げるエンジの色は妙えに美しい。若しも、このような茶盌を見たといっても、恐らく人は、信じないであろう」「のちの耀盌二盌の偶見を許され、驚倒した。おどろきの余り、これこそ明日の茶盌でなければならぬといった。若しも現存の陶家で、これに追随する者がありとするなれば、茶道は楽々と世界の大舞台に上っていたに違いない。しかし、誰がこの大天才の大芸術に追随し得よう。誰がこの無我の芸域にはいり得よう。誰が釉薬に、この贅沢を尽くし得よう」と述べています。

歴史は繰り返す。「応挙館」で開催される耀盌展に、大きな期待がふくらみます。

大本と茶の湯の心

～信仰と芸術と生活～

大本では信仰と芸術の一致を解くとともに、生活の中に活かすことが大切であると教えています。茶の湯の道もその一つ。一期一会の精神で相手を敬い、自然の恵に感謝を捧げる茶の湯の精神。和敬清寂の薫り高い生活の実践をとおして、真の信仰生活を目指します。

日本独自の文化

茶の湯、茶道とは、「一服、一杯のお茶を美味しく、召し上がっていただく」というところから出来上がった作法であり、儀式、道、千利休によって完成されました。このお茶とは、今、日常的に飲んでいる煎茶やほうじ茶ではなく、お茶の葉を、石臼で磨り潰した粉、粉状のお抹茶のことです。

コーヒーにも紅茶にも、美味しく飲むための「入れ方」がありますが、茶道ほどのものにはなりませんでした。まさに茶の湯、茶道は、日本の独自のものと言えます。懐石料理とよばれるフルコースの食事の後、一服のお茶をいただくのが、一番美味しいので、それが追求されここに至りました。明治維新になり、岡倉天心が英語で「茶の本」を著し、海外に茶の湯を紹介しつつ、茶道こそ日本であると訴えたこともうなづけるところです。

「茶の湯」の成り立ち

遣唐使によって最初に伝わったお茶は「団茶」と言われ、団子状のお茶を煮出して飲むというものでした。一部の高貴な人たちの薬、清涼飲料水として珍重されました。鎌倉時代には、栄西禅師によって「抹茶」とそのタネ、中国風の茶道具がもたらされます。

お抹茶のもつ眠気覚ましの効用は、禅の修行に最適とされ、茶道化に向かいますが、一方、「闘茶(※)」として庶民にも大流行したことがあります。やがて闘茶はその過熱ぶりから禁令となり、姿を消しますが、茶禅一味などという言葉が生まれるほど、さらに盛んになるのです。

当時一番力を持ってきた武士社会にも広がり、茶の湯は、礼儀作法、教養、さらには最先端の文化としてももてはやされていきました。信長、秀吉の時代には茶の湯政道と言葉が残っていますね。こうした流れの中に、村田珠光、武野紹鴎らが登場し、「わび茶」の流れが出てきます。それを完成させたのが千利休です。

今日普及している煎茶とその飲み方は江戸時代に伝わったものです。

大本と「茶の湯」の関係

さて、ここで、この茶の湯と大本の関係を見てみたいと思います。まず上野にある大本東京本部のお茶室「東光庵」では、毎月の祭典の後に「添釜」と言ってお席がもたれ、お茶を多くの参拝者に召し上がっていただいています。1月は成人式があり、成人者にも入席してもらいました。これらは亀岡、綾部の両聖地も同じで、さらには多くの全国にある〝神の家〟でも行われています。

また両聖地では、コノハナザクラの咲くころ「観桜茶会」が開かれ、多くの市民も来てくださり、サクラとともに、お茶席も楽しまれます。また、中秋の名月には、「秋をめでる夕べ」も催され、やはり、月をめでつつ茶会になります。

数が問題ではありませんが、亀岡の聖地だけでも、23カ所ほどの茶室があり、炉が切ってあります。

これだけではありません。日本の伝統文化にふれてもらおうという文化庁の企画を受け、亀岡市の委託で、街の子ども30人を対象に、楽焼きとお茶を楽しもうという事業「白梅大茶会」を2年させてもらったことがあります。子どもたちに菓子器など作ってもらい、お茶のお稽古をし、最後には、お茶席を持ち、保護者や大勢の市民に楽しんでもらいました。

外国人の方を対象に大本日本伝統芸術学苑も20年間続けました。1カ月間、茶道、能楽、書道、武道を学んでもらう夏季セミナーです。生徒は毎年20～30人。和服も準備し、師匠の元、マンツーマンで教えましたが、このアシスタントも大本の者が担当しました。

どうして、これほど、大本では茶の湯が盛んなのでしょか。それは大本の2人の教祖、出口なお開祖さま、王仁三郎聖師さままでさかのぼります。

ここに開祖さまの孫で、子ども時代には寝起きを共にしていた出口直日三代教主さまのご文章があります。

「私の祖母は、一生の大方を極貧の中にすごしたので、茶の湯というもののあることすらおそらく知らなかったのではないかと思うのですが、祖母は高い茶のこころを身につけていた」「祖母は立ち居にも、茶の心が宿っているようでした」「祖母を尊敬した周辺のものが・・・お茶を身につけようとするのは自然のなりゆき」などです。

事実、開祖さまのご生涯は、極貧のままが続いているかのようでしたが、立ち居振る舞いは品格高く、天地の冥加を諭し、ご自身もお水はもちろん、お土からいただいたものは、赤葉でさえも大切に調理し、芋を使った料理でもお客さまには芋でもてなし、ご自分はその皮を召し上がっていたことが伝えられ、「祖母の

（※）茶の点て方や、茶を飲んで香りや味から産地を推測するなどして、勝敗を競う遊び。

～21世紀・生きがい講座～

猪子　恒
大本東京宣教センター長

生活には、お茶でいう和敬清寂のひびきが、どことなくただようている」と言わしめたのだと思います。

お茶は天国の遊び

また「聖師さまが高雅な開祖さまのご生活を鏡となされまして、―茶は天国の遊びである―とつねに仰っしゃいました」「私は、父が書いたものの中に、『俳道』と『利休』にかんする一節が・・・父のいう『俳道』とは『茶道』と一つのもので、その俳道をふまえたところに、父の理想も存在していた」とあり、みろくの世、地上天国の建設を説く大本の理想との深いかかわりが、ご理解いただけるものと思います。

ですから聖師さまは、「芸術は宗教の母なり。芸術は宗教をうむ」「吾々は左手に芸術を曳かせ、右手を宗教に委ねて、人生の逆旅を楽しく幸多く、辿り行かしめんと欲する」とも説き、書道、絵画、短歌、文芸、作陶、音頭などさまざまな分野を奨励し、自身も実践されたのです。

大本の〝教風〟として

三代教主さまは、少女時代に茶の湯を知り、やがて師匠について精進されました。第二次大本事件で弾圧を受けた時には、人眼を避け田舎に移り住み、農業にいそしみながら、能楽とともに茶道に打ち込まれたのです。その時の言葉に「茶によって救われた」というのがあります。後年には、「一派を立てられてはどうか」とすすめられるほどの大茶人であったと伺っています。

三代教主さまは、昭和37年、大阪で開かれていた「千利休展」をご覧になり、随筆にしています。

まず長谷川等伯の描いた肖像画を目にし「利休の眼は、澄み切って、世俗を超えた、遠いところを見つめていた」だから、天下人・秀吉も「ある種の劣等感をいだかざるを得なかったことでしょう」としています。さらには展示品の数々の茶道具、茶入、茶碗、水指を紹介しながら、それまで輸入品だった道具類を、ずば抜けた審美眼、天才的なヒラメキによって日本人の技による和物に置き換えていくのです。そればかりではなく、武士が刀を外して入る「にじり口」、露地と呼ばれる茶庭、小間、荒壁の茶室にも、先師たちの精神をよく守り、日本の自然に順応して独自の工夫を展開したのです。

ですから、三代教主さまは、利休は「彼岸に、はっきり立っている」と表現されていますし、開祖さまのお姿、聖師さまのお示しと重ね合わせたことも理解できると思います。さらに歴代教主さまのお作品と、三代教主さまが身をもってお示しになった茶の湯を中心とした日本伝統文化、芸術は大本の教風として確立されていき、やがて海外作品展、宗際化活動へと発展していきます。

抹茶の効能

三代教主さまは、茶の湯は「医学的」「科学もある」と先見的な言葉も述べています。昔から、覚醒、解毒、消臭、健康増進作用は経験的に知られるところで、さらに近年では、カフェイン、カテキン、ポリフェノールが注目を集めています。お抹茶ではなく緑茶による最新のデータではありますが、国立がん研究センターが発表したデータによると、「緑茶を習慣的に飲むことにより、男女、すべての死亡リスク、さらに心疾患が下がる」「1日に3～4杯、5杯以上と増えるほど下がる」と結論づけています。

また、NHKのガッテンでもお茶のすぐれた健康効果を取り上げ、「がんの死亡率が激減、脳血管疾患の抑制」「ほうじ茶は、香りを嗅ぐだけでもリラックス効果がある」「水出しの緑茶はカフェインが少なく、夜でも飲める。子どもも飲める」「牛乳と一緒にとるとカテキンの吸収率が高まる」と述べています。

火と水とお土の恵み

五代教主出口紅さまは、お若い頃から茶の湯に親しみ精進を続けられました。ご就任に当たり、ご神前でお点前をされ、お供えをなされました。平成18年には、綾部の境内地に鶴山みろく村をお開きになりました。ここは、教主さまが自ら畑作の農、養蚕と機織、窯芸道場での作陶をなさるための場所です。これらは人類の歴史をさかのぼっても、食べ物、衣、そして火と水とお土の恵みによってもたらされる器であり、命、生活の始まり、原点でもあります。同時にこれは、本日お話ししてきた茶の湯の心にもつながります。

このように大本と茶の湯は切っても切れない関係にあり、必ずどこかで抹茶が出てくるほどです。そこで「せめて頂き方だけでも身につけなさい」と言われます。そうした実践を通して、信仰・芸術・生活の向上を目指していきたいと思います。

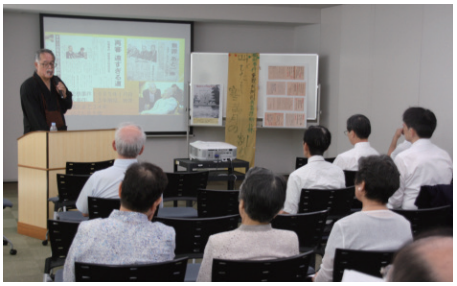
掲載文は、平成31年1月16日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は、8月11日午前10時30分から、斎主・加藤道明祭務課長のもと執行され、二百五十人が参拝した＝**写真左**。祭員は千葉主会が、伶人は二絃の会関東支部、『大本神諭拝読』を小林龍雄神奈川主会長が、添釜を高野社中が担当した。

祭典後、教主さまの開教127年瑞生大祭ごあいさつを拝聴。ついで鈴木穎一大本本部長があいさつに立ち、去る7月16日～20日にかけて台湾で開催された第3回人類愛善会国際ネットワーク（IRUHA）国際会議訪問団の様子や、教団の人材育成機関である「梅松塾」が新たに「大本愛善学苑」として教主さまよりご命名賜り、令和2年度から一新されることなどを紹介。また本年7月から関東教区の特派宣伝使制度を改め、東京宣教センター職員が「駐在宣伝使」を兼務して、特任宣伝使とともに教区の発展に努めていくことを述べ、協力を呼びかけた。

この後、生命山シュバイツァー寺代表の古川龍樹氏があいさつ。古川氏は親子二代にわたり冤罪死刑囚の救済活動に取り組んでいる。この日は午後1時30分から2階講座室で、「福岡事件から考える再審・恩赦・死刑」～恩赦運用言明から50年、悲劇を繰り返さないために～（主催・福岡事件再審キャンペーン事務局／生命山シュバイツァー寺、共催・人類愛善会東京本部）と題して講演を行った＝**写真上**。



21世紀・生きがい講座

第197回21世紀・生きがい講座は7月17日、港区新橋の航空会館で開催され、斉藤泰大本教学研鑽所事務局主幹が「生命の重さを考える」～大本と生命倫理活動～と題して講話した＝**写真下**。受講者は30人（内、一般10人）。

斉藤講師は、大本・人類愛善会が取り組んできた「脳死・臓器移植反対活動」やヒトES細胞研究、クローン技術の開発など、世に先駆けて警鐘を鳴らしてきた経過を紹介し、「生命の始まりも終わりも人智を超えた大自然の営みの中にあり、偉大な神秘の力に対する畏敬の念を忘れてはならない」と説明。「私たちは精神（魂）だけで生きているのでもなく、肉体だけで生きているのでもない。魂（霊）と肉体が一つになって初めて生き生きとした〝生命力〟が生まれる。霊・力・体の三元論で考えないと、宗教は迷信に陥り、科学は唯物主義になって人類を破滅に向かわしめる」と述べた。

参加者からは、「脳死判定が早期に否定されるべきだと痛感した」「生命倫理について考えることが、そのまま一人ひとりがどのように生きるかということだと思った」「大本の霊魂観、生命観に基づく生命倫理問題について勉強になった」などの感想がよせられた。

耀盌顕現70周年記念 東京大本芸術祭

出口王仁三郎 耀盌展 YOWAN

2019年
10月3日(木)▶6日(日)

東京国立博物館 応挙館

展示時間
3日(木) 13:00～16:00
4・5日(金・土) 10:00～16:00
6日(日) 10:00～15:00
※入館は閉館30分前まで
※呈茶席【場所：九条館】

特別講演会「耀盌を語る」
10月4～6日 13:00～14:00
場所：九条館

チケット ticket

入場は無料。但し入場券が必要です。
「大本東京本部」までお申し込みください。

10月 東光苑祭典・行事予定

3日～6日（木～日）
耀盌顕現70周年記念 東京大本芸術祭
『出口王仁三郎 耀盌展』

13日（日）午前10時30分～
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

16日（水）午後7時～8時30分
21世紀生きがい講座（航空会館・新橋）
講題 日本に生まれた幸せ
～今、私たちに求められているもの～
講師 合田千華（あじあ研修株式会社代表）

18日（金）午後7時～
『霊界物語』全国一斉拝読会（52回）

26日（土）午前10時30分～
家庭平安祈願祭（28回）